

持続可能な原材料継承の標津モデル

標津町ノリウツギプロジェクトの展望と提言

北海道標津町

”宇陀紙”と”ノリウツギ”

「宇陀紙」製作に不可欠な天然のネリ

ノリウツギ（アジサイ科の低木）の内樹皮から抽出される粘液は、和紙製作における「ネリ」として極めて重要な役割を果たします。

- ✓ **宇陀紙の原料**：奈良県吉野町福西さんによって漉かれる和紙”宇陀紙”。国宝・重要文化財修理の裏打紙として重要な原材料。
- ✓ **唯一無二の原料**：白土を混ぜる宇陀紙において、漉き船の中で、楮（コウゾ）繊維を均一に漉くためノリウツギが必須。特に夏場の紙漉きには唯一無二の素材。
- ✓ **資源減少**：古くから北海道産ノリウツギは全国に流通。近年は、獣害や収奪式採取により資源が減少。高齢化による担い手不足も重なり、途絶えつつある原料の一つ。

ノリウツギの花



6～8月に内樹皮を採取

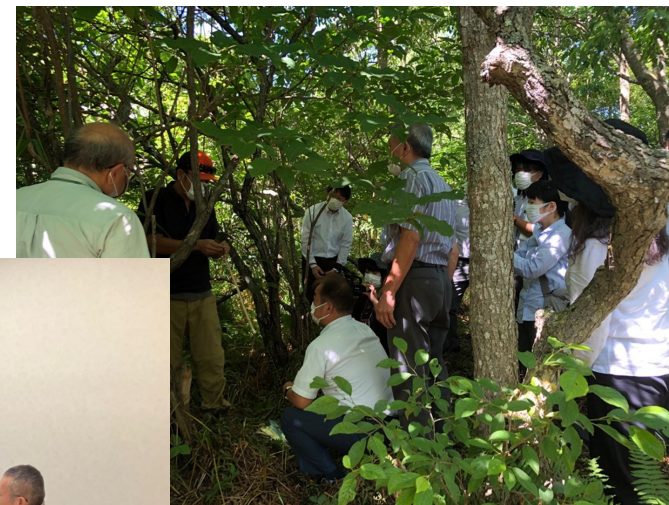
取組の経緯と美術工芸品修理管理等業務支援事業

文化庁の調査事業の標津町訪問が転機

2021年の文化庁調査官による標津町訪問を契機に、北海道林業試験場、植物学の権威である鈴木三男東北大名誉教授（標津町在住）のサポートを受け、公的な支援の枠組みを構築し、ノリウツギ採取事業を開始。

- ✓ **生産地・修理現場訪問：** 管理等業務支援事業の支援を受け、吉野町福西和紙本舗や奈良博を訪問。和紙や保存修理を学び、事業価値を把握。
- ✓ **知のネットワーク：** 東文研（R5に町と連携協定締結）や鈴木教授を中心に、和紙とノリウツギに関する研究会を毎年開催。科学的知見から事業をサポート、技術伝承にも寄与。
- ✓ **地域間交流：** 吉野町、標津町の両町長が互いに訪問し、地域間交流を促進。

文化庁らによる標津町視察



和紙・ノリウツギ研究会



首長による産地訪問

これまでの取組①: 資源の可視化と基盤構築



R3年度

資源量調査の実施

1万本以上のノリウツギ自生を確認。供給地としての可能性を確信。



R4年度

供給体制の開始

採取量140kgを実現。吉野町等との産地間交流を開始。



R5年度

連携の促進

東京文化財研究所との連携協定締結。科学的知見を導入。



R6年度

認知の広がり

「いくらちょうちん」製作会等、町内での活動が本格化。

段階的なステップを踏むことで、単なる「資材供給」から「地域プロジェクト」へと発展させてきました。

これまでの取組②: 町民との一体感の醸成



次世代への継承教育

ノリウツギの供給先である福西和紙本舗福西さんによる地元小中学校での「手漉き和紙体験」や、ノリウツギを使った和紙による「卒業証書」の授与を通じ、地域の誇りを育んでいます。



観光と文化の融合

標津の象徴である「サケ」と「ノリウツギ」を組み合わせ、新たな地域資源の開発やブランディングを推進しています。

INSIGHTS

実践を通じて再認識された 安定的な原材料供給における構造的課題

現場活動から見えてきた供給継続の要件



物理的負荷と安全管理

自然環境下での採取には相応の身体的な負担と、ヒグマや害虫などから身を守るための経験が不可欠であることを再確認しました。

採算構造の最適化

既存の供給網には限界があり、経済的な自立性を確保するための新たな収益構造の構築が求められます。

環境変化と資源管理

天然資源の変化を前提とした、長期的かつ計画的な資源管理（栽培化を含む）の必要性が明らかになりました。

全国的な継承危機の共通要因

かつて各地で途絶えた理由の再発見

標津町が直面している課題は、かつて全国の原材料の産地が供給を断念した原因と同一であると考えられます。

- **見えないコスト**：採取現場の負荷が価格に反映されにくい構造
- **担い手の不在**：「生業」としての持続可能性の欠如
- **資源の不確実性**：天然資源のみに依存するリスク



関係者の自己犠牲に頼る活動では、持続的な資源供給は維持できません。

標津町は、これらを「現代の課題」として正面から捉え、解決の糸口を模索することを目指しています。

STRATEGIES

持続可能な仕組みへの転換： マネタイズと地域理解の促進

経済的自立を支える多様な資金循環

✓ 公的支援の戦略的統合

文化庁事業と「森林環境譲与税」を効果的に組み合わせ、基盤を安定化。

✓ 高付加価値化による収益化

地域資源としてのストーリーを持たせ、観光資源や特産品へと発展。

✓ クラウドファンディング等による外部資金の導入

魅力ある地域資源化により、ふるさと納税制度やクラウドファンディングなどの外部資金の活用。



目指すべき姿

未来への「投資」

補助金は「延命」のためではなく、地域の新たな「生業（なりわい）」を創出するための投資として位置づけられると考えます。単なる原材料供給から、ストーリーを持たせた地域資源に発展させます。

人口減少社会における「伝える力」の効力

町内の少ない人口だからこそ可能な「一体的な共感」

人口密度が低い地域特性は、情報伝達の「深さやスピード」においてアドバンテージとなります。

- **町民の理解**：「自分たちの町が国宝や文化財を守っている」という共通認識の醸成。
- **担い手の確保**：地域の誇りの共有が、次世代の「成り手」を生む土壌となる。



外部発信と新たな担い手の受け入れ



関係人口の拡大

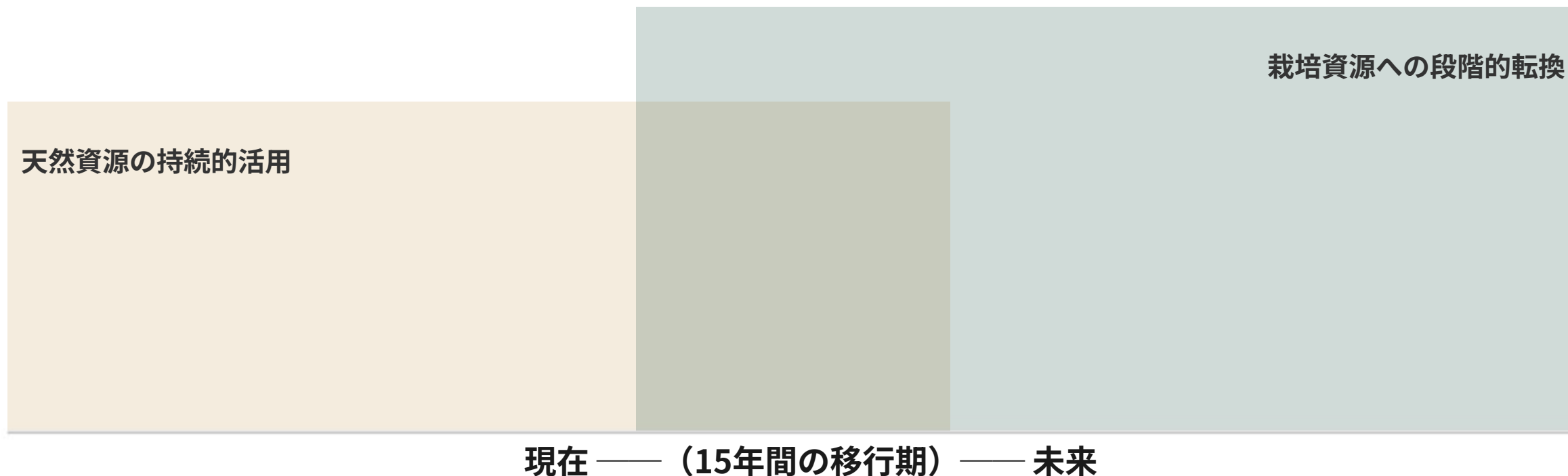
標津町内だけでなく、全国へ向けて「伝統を支える最前線」のストーリーを発信。外部人材が関わりたくなる仕組みを作ります。



新たな価値の創出

伝統の型を守りつつ、現代のニーズに合わせた新たな製品・体験などの価値を創出し、活動の裾野を広げます。

持続的な資源確保の 15年戦略:天然資源から栽培資源へ



栽培物が利用可能になるまでの15年間で、天然資源の適切な管理と科学的な知見で繋ぎ、持続的な資源体制を構築します。

「守る」ことで、「誇り」を創る

標津町は単なる原材料の供給地ではありません。日本の文化を最前線で支えるプライドを、地域のカへと変えていく。標津町の挑戦は、次世代への確かな贈り物になると考えます。

ご清聴ありがとうございました

